

# 大正 いくつもの顔を持つ時代

大正時代は、15年という短い期間ですが、様々な出来事がありました。「大正デモクラシー」の名の下に「民衆の力」が強く意識され、藩閥による政治支配は揺らぎを見せて、政党政治が始まります。また、女性たちは権利の向上を求めて声をあげました。

第一次世界大戦は、日本に好景気をもたらしました。国内では文化の成熟や生活の洋風化が見られ、現代につながる生活スタイルが確立されます。「今日は帝劇、明日は三越」という言葉に象徴される華やかな大正文化を、人々は享受しました。

大正後期には、日本は戦勝国として国際聯盟に加わり、二十一条要求やシベリア出兵など周辺国との間には軋轢を招きました。国内では米騒動が発生し、戦後不況が始まります。関東大震災は不況に追い討ちをかけ、以後、徐々

に都市と農村の格差は広がり、社会運動が活発化しました。暗い世相があった一方、皇太子裕仁親王は欧州外遊、摂政就任など期待を集めつつ存在感を増していきました。

このように、いくつもの顔を持つ大正時代は、短くも光彩を放っています。

昨年当館では、この時代を振り返る『写真集 大正の記憶』(吉川弘文館)を刊行いたしました。今回、それをもとに当館が所蔵する大正時代の絵葉書を中心に同時代の写真などの資料を織り交ぜ、大正の様相を視覚的なイメージとして展示いたします。同時代人々が出来事をどのように見ていたのか、出来事はどのように伝えられていたのか、テレビ放送もインターネットも無い時代に、絵葉書などの紙媒体が果たした役割を考えます。

(文中・展示品中に登場する用語には差別的な表現がみられるものもありますが、歴史用語としてあえてそのまま使用しました。)



## III

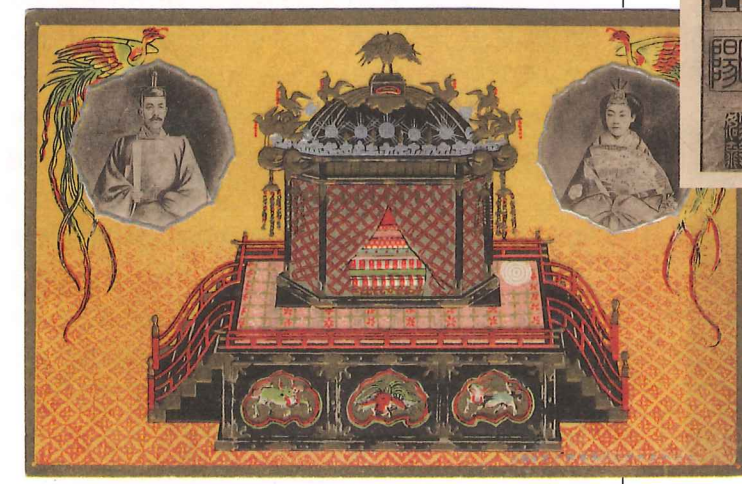
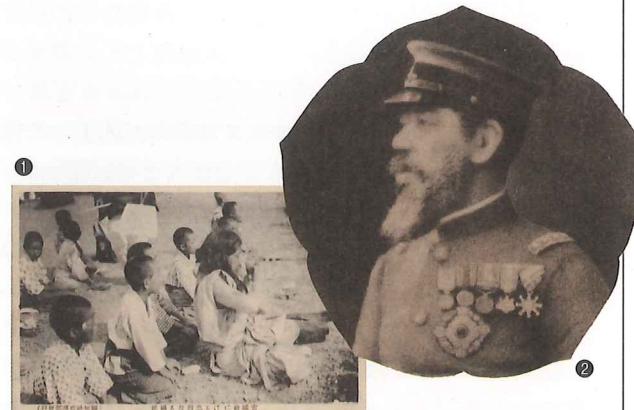
# 明治の終わり・大正の始まり

### 明治天皇崩御

明治天皇は、日露戦争中の明治37年(1904)頃から徐々に健康を害しはじめ、同45年、高熱を発して昏睡状態に陥りました。宮内省からの病状発表があると皇族・華族、政府関係者らが参内し、また一般国民も皇居前広場に集合して回復を祈りました。いったんは小康を保ちましたが、ついに7月30日に崩御しました。61歳でした。

日本中が大きな悲しみに包まれる中で行われた大葬の礼(大正元年(1912)9月13日)は、初めて国民の前に明らかにされた天皇の葬儀でした。そして大葬は、当時の絵葉書や版画を見てわかるように、日本の近代化を牽引した明治天皇の姿と日本の伝統を直接結びつける役割を果たしました。

大葬の当日、学習院長であった陸軍大将・乃木希典は夫人と共に自決しました。乃木の死は、明治という時代が遠く過ぎ去ったことを象徴する出来事として多くの人々に受け止められました。



### 大正天皇即位

明治天皇は「大帝」のイメージをもって当時の人々には認識されていましたが、天皇・皇室は国民からはあまりに遠い雲の上の存在でした。

一方、大正天皇は、皇太子時代の明治33年(1900)から45年(1912)までの間に、沖縄を除く全ての道府県、そして韓国を巡啓して人々の前に姿を現しました。皇太子の巡啓に際しては、各地で道路や電灯の整備、鉄道の建設が行われ、近代化の象徴となりました。巡啓によって、日本全国で皇室の権威は高まり、また実態を伴った皇室の姿が一般国民の間に広まりました。新聞には皇太子が発した肉声(いまいごう)が掲載され、肖像は絵葉書になりました。絵葉書には皇太子だけでなく、節子妃(貞明皇后)や三人の皇子の姿も写され、近代的な家庭の姿として表されました。

大正4年(1915)の大正天皇即位大礼が一般国民も参加できる形で挙行されたことは、皇室と国民の接近をより明確に示す出来事でした。前近代の天皇はもちろん、明治天皇の即位も京都御所において「儀式」として執り行われました。しかし、大正天皇の即位大礼においては、京都で博覧会が同時に開催されたり、東京中に奉祝門が建設されて花電車が走ったりと、国家を挙げての「ページェント」(祝典)となりました。

また、大正天皇は、日本にとっての最大の同盟国であった英国との間で勲章や軍位の名誉称号を交換するなどして、西欧式の外交スタイルを積極的に取り入れました。

病弱な天皇というイメージばかりが先行しがちな大正天皇ですが、皇太子時代および即位から数年間は、「新時代を牽引する君主」の姿が当時の一般的なイメージでした。

(リサーチアシスタント 長谷川怜)



- ※所蔵表記のないものは当館蔵
- ① 明治45年 宮城前における忠烈なる国民
  - ② 大正期 明治天皇肖像
  - ③ 大正元年 大正天皇真影と大正改元の詔
  - ④ 大正4年 大正大礼記念